

作品番号：1

作品タイトル：思い出の背を滑って

選択画像：A

大きく響く蝉の音にはっとした。

目の前には大きな恐竜の滑り台。暑さのあまりぼーっとしていたのだろうか。私は慌てて周りを見渡した。

この恐竜広場が大好きな娘は、どうやらはしゃいでいるうちにどこかに行ってしまったらしい。とはいえこの暑さだ。熱射病の心配もある。早く見つけなければ…。

帽子を忘れてしまったらしい私はダラダラと流れる汗をぬぐって目線をあげた。

「ちょっと！探したよ！！」

近くで大きな声がしてびっくりして振り返ると、妙齢の女性と目が合った。

もしかして娘が迷子で泣いているところを保護してくださったのだろうか。

「ああ、すみません。もしかして迷子の娘が…」

暑さで自分の声もしゃがれる。自分もどうやら暑さにあてられたらしい。

女性はちょっと驚いて、それから何もなかったかのように落ち着いた声で「ええ、そうなんですよ。ちょうどお母さ…奥様もいらっしゃって…」と車で家族が待っていることを教えてくれた。

「今日はものすごく暑いでしょう？代わりに私があなたを探しに来たんです。」

そう穏やかに笑う女性も、暑さで汗が止まらないようだ。

「ありがとうございます。それにしてもこんなに暑いとは…去年は冷害で米も不作だったというに…」

そうそう、それで娘はいつものお米じゃないと嫌だ！といったのを叱ったことを思い出した。もうすぐ思春期で、本当に手が付けられない。まったく困ったものだ。

「…そうですね、本当に暑くてまるであの時とは違いますから」

少し寂しそうな様子で笑った女性の横顔とエピソードに自分の娘の輪郭が重なった気がして違和感を覚える。

「さ、いきましょうか」という女性と歩き出したとき、自分の鞆についた見慣れないキーホルダーが目に入った。

自分の名前と「認知症」の文字。

ぼたり、と汗が落ちて、

ひと際大きく蝉が鳴いた。

作品番号：2

作品タイトル：家常茶飯

選択画像：A

寄り添う高木の青葉の香りも拾いつつ、薫風が朝の恐竜広場を吹き抜けた。
樹下のベンチに腰掛ける老婆が、傍らの樹木の方を向き問いかける。

「あれは何と言ったかな、あのすべり台の怪獣は」

「あれは怪獣でなくて恐竜だわ」老声が答える。

「ナントカドラゴンでなかったかな」

「いやあ、ナントカザウルスだわ」

視線の先には、二頭のティラノサウルス『大（だい）ちゃん』と『高（こう）ちゃん』が子どもたちを楽しませていた。

大きい方の『大ちゃん』には、お腹の階段を上ると「グワオー」と鳴き声が聞こえる仕掛けがある。

しばらくの沈黙を破ったのは老婆だった。

「最近あれだなあ、きくない（黄色い）新幹線は無くなったんかね、孫が言っとったけど」

「いやあ、まだ二年くらいは引退せんらしいで、ナントカドクターだろう？」

「そうだなあ、この前走っとったもんなあ、そうそう、ドクターナントカナ」

老婆が東海道新幹線の線路方向に顔を向けたのが合図であったかのように、N700Sが名古屋方面へ駆け抜けた。

ドクターイエロー（T5編成）の引退はまだ少し先である。

「去年アレだわ、動物園にアレが来たもんで、孫が友だち何人か連れて盆過ぎに帰って来たわ、ナントカドラゴンな」老婆が嬉しそうに話し出す。

「ああ、アレだろう、ドラゴンな」

目の前では恐竜の尻尾から、流し素麺のように子どもたちがきゃあきゃあと、流れて来る。

「子どものドラゴンな」

「そうそう子どもドラゴンな」

子どもたちの歓声が恐竜を吹き抜け、新幹線も交互に通り過ぎて行った。

「じゃあ、ワシはそろそろご無礼するわ、モーニング行かなかん」

そう言うと、幹に隠れるほどスマートな、ヘルメット姿の老人が、傍に停めていた自転車にヨイショと跨った。

老婆も腰を上げる。

「ワシも、今日は名駅行かなかんわ」

「またな」と、同じくらいのペースで分かれて行く散歩友だちの二人に、遠くで『大ちゃん』も「グワオー」と挨拶をした。

作品番号：3

作品タイトル：さなちゃんの大発見

選択画像：A

さなちゃんはじーちゃんとおさんぽがだいすきです。じーちゃんはなんでもしています。空の雲、草むらの中の虫、池にいる鳥。さなちゃんの「あれなに！」にぜんぶこたえられるのはじーちゃんだけです。

でも、ちかごろきになることがさなちゃんにはあります。ちかくの公園の、恐竜のすべり台のことです。

「ほれ、今日はオオダカオスベリザウルスのとこいくぞ」

さなちゃんはさいきん、恐竜の図鑑をよんだのですが、そこに「オオダカオスベリザウルス」がのっていませんでした。

「オオダカオスベリザウルスはきょうりゅうじゃないとおもう」

「ほうか。なんでそう思った？」

「ずかんにいないから！」

ははは、とじーちゃんはわらいました。「この世は図鑑に載ってないことだらけだぞ」

テクテク歩きながらさなちゃんはなやみました。ずかんにのってないことは、どうやって知ればいいのでしょうか。

かんがえているうちに、公園につきました。

「図鑑にないことは、自分で調べなかん」

そういって、じーちゃんはちいさな手帳とえんぴつをさなちゃんにわたしました。

「よく見て、触って、考えてみい。そしたらこいつのことも分かる。分かったらそれを書く。ええか？」

さなちゃんは「わかった！」とへんじしました。

オオダカオスベリザウルス

おおきさ・にかいだてのいえくらい

いろ・かれくさいろとちゃいろ

てざわり・ざらざら、ぶつぶつ

におい・おいしいのにおい

きづいたこと・てのゆびがにほん

さなちゃんはきづきました。

「じーちゃん、これ、ちがう！ きょうりゅうのゆびはご、か、さん！」

じーちゃんは「よお気づいた」とさなちゃんのあたまをなでてくれました。

さなちゃんは「おまえはきょうりゅうににてるけど、ちがうから……オオダカオスベリザウルスモドキだ！」と指をピツとのばしてさげびました。

「大発見だがね！」

じーちゃんのたかわらいがあおい空にむかってのびてゆきました。

作品番号：4

作品タイトル：それ、いいかも

選択画像：A

「どうして、ここに来たいと思ったの？」

月香は不満気に言う。

確かに、子連れが家族がたくさんいる大高緑地に、僕たちのような恋人同士がデートとして訪れるのは珍しいのかもしれない。

僕たちは公園のベンチに座っていた。

「カフェとか映画とかもいいけど、たまには、こういう場所もいいだろ？ 付き合いたての時は、ここによく来たじゃないか」

「あれは、コロナの時だったからだよ。あの頃はどこにも出かけられなくて、ここは『三密』を避けられる少ないスポットだったから」

「告白したのも、ここだったよね」

「そうだね。あなたが『付き合ってください』なんて私に言っている目の前で、子どもたちが遊具で遊べなくて泣いてたんだから」

「そうだった？」

「そうよ。コロナの感染防止のために遊具が使用禁止だったんだもん」

あの頃、ボクらはマスクをしたお互いの顔しか知らなかった。でも、今はそんな縛りもない。

ここまで困難を乗り越えてこられたのは、月香のおかげだ。

僕は覚悟を決めた。

「ここに、これから一緒に来たいなって思って、月香を連れて来たんだよ」

「どういう意味？」

「ほら。ああいう未来もいいかなって思えてさ」

僕が指差した先には、恐竜の滑り台を嬉しそうに滑っていく子どもたちがいる。そして、その子どもを見守る親たち。みんな、笑顔で、幸せそうだ。

「……ああいう未来？」

「うん。いつかあんな風に子どもができて、月香とここで一緒に見守れたら、いいな」

「……うん。それ、いいかも」

「だから、結婚してください」

あれから、何年が過ぎただろう。

「どうして、ここに来たいと思ったの？」

「だって、子どもと一緒にここへ来たいなって、結婚する前によく話したじゃないか」

「その肝心な子どもたちは塾とクラブ活動で忙しいから、ここに付いてきてくれないじゃないの」

思い描いていた未来とは、若干違った。

思うようにいかないことも多いけれど、それも込みで幸せだ。

作品番号：5

作品タイトル：ナゴヤサウルス

選択画像：A

名古屋から恐竜の化石は出土していない。

名古屋に恐竜は生息していなかったということだ。

それでも俺たちはここを選んだ。

なぜなら名古屋人には、

恐竜になる見込みのあるヤツらが揃っているからだ。

まず、肉食性。

無駄なく肉を食い尽くす上に

骨までしゃぶる猛者までいる。

手羽先ってやつをさ！

それから、雄叫び。

日常的にギャアギャア言ってるのを耳にする。

「あの人は よお怒るで、おそぎゃあ」「そーだぎゃあ」
ってな。

ちなみに、

「そうも ぎゃあつく ぎゃあつく 言やあすな」とか言い合っている、
自覚があるらしい種も見かける。

最後に残忍性。

俺は聞いたんだ、めちゃくちゃ笑顔で

「ひきずりまわす」って言ってるのを。

「明日は久しぶりに孫ちゃんたちが来るもんでー」

ってニコニコで言った後に

「ひきずりまわしする」

……どんな仕打ちだ！？

おお、こわいこわい。

あ、この辺りの人たちは、変わったものを怖がるよな。

「今日のご飯、こわいねー」って。

その割にさ

俺たちのことは怖がらずに

仲良く遊んでくれる。

名古屋の人たちには

やっぱり 恐竜の仲間になる素質がある。

作品番号：6

作品タイトル：魔法のジュラシックスライダー

選択画像：A

夕飯の後に家を抜け出して、僕は夜の大高緑地にやってきた。昼は親子連れで賑わっていた公園も、今は静けさに支配されている。

足音が響かないよう慎重に、滑り台の階段を上る。ハリボテの恐竜の腹に空いた穴をくぐり、僕は踊り場に腰かけた。夜空には丸い月が輝いている。

昼間はダメだった。何度念じながら滑っても、僕は公園の地面に着地した。そりゃそうだ。魔法は夜に起こるものって相場は決まってる。

魔法の発動には鍵も必要だ。ポケットから取り出した石を月の光にかざす。滑らかな黄色の中に、小さな黒い影が見える。お父さんが科学館で買ってくれた、虫入りの琥珀。太古の記憶を閉じ込めたこの石があれば、今度はうまく行くはず。

琥珀を握りしめ、僕はまぶたを閉じる。大高緑地には動かぬ恐竜達が棲んでいる。でも僕は、動く彼らに会いたい。お願い、僕を君たちの時代に運んで。祈りを込めて滑り面へと体重を移動させ、

「うわっ」

目を瞑っていたせいでバランスを崩し、僕は仰向けにひっくり返った。

その瞬間、僕の背に伝わってきたのは、大地を揺るがすような振動。反射的に伸ばした手がかんだのは手すりではなく、ゴツゴツとした鱗。

滑り台じゃない！ 本物の恐竜だ！

月に見降ろされながら、僕を乗せた恐竜はゆっくりと進む。左右に揺れる巨体から振り落とされないように、必死に硬い鱗をつかんだ。夏の名古屋よりも蒸し暑い空気が僕を包む。

「や……やった！」

興奮のあまり思わず声が出た。恐竜が低く唸り、頭を持ち上げる。しまったと思う暇もなく、背中が角度が垂直になり、僕の体はずり落ちる。背から尾へ、そして地面へ。

気づけば僕は、滑り台の降り口に寝転がっていた。足に触れるのは柔らかな芝生。僕を乗せていた恐竜は、ハリボテに戻ってしまった。

「……夢、だったのかな」

足元に落ちていた琥珀を拾い、月にかざす。溶けて消えたように、石の中の虫がいなくなっていた。

作品番号：7

作品タイトル：階段をひとつ上る

選択画像：B

外は蝉も沈黙するほどの猛暑だというのに、市政資料館の小さな閲覧室は冷房が効きすぎている。

あたしは冷えとそれによる脚のむくみに耐えかねて、部屋を出た。廊下を歩いた先、中央階段はがらんとしていた。夏休みの今、ロケ地として使われるほどの歴史と価値のあるこの中央階段には、いつも観光客らしき人がいた。誰の姿もない今なら、とあたしはこわばった身体をほぐすためにその豪華な階段を下りては上る。二階から一階、また二階、三階へと。

まばたきするたび、瞼の裏に名古屋の都市開発についてのさまざまな資料が浮かんで消える。今よりずっと狭い市域の地図、草書体で書かれた意見書、旧字体混じりの表。先人たちの試行錯誤の積み重ねが。

卒論用の資料が見つからないと先生に相談したら、市政資料館に行くよう言われた。

「名古屋市が第一志望ならちょうどよいかと」

その通りだと思ったけれど、卒論調査と公務員試験の勉強の並行はかなり”えらい”。あたしはため息をつきながら階段を下りた。

「わ、ドラマのまんま！」

感嘆の声と共に若い女性がひとり入り口に立っていた。邪魔にならないよう立ち去ろうとしたあたしをその人は呼び止めた。

「写真、撮っていただけますか？」

あたしは快諾し、預かったスマホで写真を撮る。

「ありがとうございます！ この裁判所跡、すごい素敵な建物ですよ」

——違う、ここは。

「ここは名古屋の全部を記録して保存してる場所です。今も現役です」

女性が「お詳しい！ 職員さんですか？」と目を見張った。

「いえ、ただの学生で……」とあたしはぎこちなく頭を下げた。

今も現役。

不意に出たその言葉は、なぜか胸にすんと落ちた。きっと今まで多くの資料を見てきたからだと思う。この場所は過去の遺物じゃなく、未来のために今も動いている。あたしと同じ。

いつしか身体は温かさを取り戻していた。あたしは階段を一段ずつ上って、また閲覧室へ向かう。

作品番号：8

作品タイトル：サチアレ

選択画像：B

シンプルマザーの肩書に物を言わせるつもりはない。だが、お互いに一生後悔するより、今こそ伝えるべきだと決意して、

「結婚するなら式だけでも挙げなさいよ。2人だけでもいいから」と口にした。

「2人だけなら、なおさら不経済だろ。祝儀当てに出来ないんだから。それに、直人もいるし」そうだった。相手の女性には直人君という子どもがいる。

そこで「私が費用全額だすわ」と見栄を切りたいところだが、今月もカツカツだ。

銀行の通帳に印字されている数字を思い出して

「身内だけで披露宴代わりの食事会する？」

と、言い換えた。

だが、「見せ物じゃねえし、そんなもんやらん」と私の提案は即座に却下された。

結局、紙切れ1枚を役所に提出して、息子は所帯を持った。

「ただいま」の声が聞けない寂しさに慣れた頃、息子夫婦連名のハガキが届いた。『家族になりました』という報告の便りのようだ。

アンティーク調の階段の途中で、親子3人が顔を寄せ合っている写真が載っている。弾けるような笑顔の母子と一緒に写る息子の顔が、別人のように誇らしげだ。

ステンドグラスから降り注ぐ光に、思わず「さちあれ」と言葉がこぼれた。

作品番号：9

作品タイトル：判決の階段

選択画像：B

いつだって悪いのは、僕なのか。

僕と彼女は、久屋大通公園で口喧嘩になって、ばらばらの方向に歩き出していた。

ただでさえ、口がうまくない僕は、彼女にうまくいい返せない。

だからって、いつも僕が悪いのか。

歩きながら彼女への怒りが、どんどん湧き上がってくる。

気がつくと、目の前に古い立派な建物があつた。名古屋市政資料館らしい。

とりあえず中に入ってみることにした。

建物に入ると大理石の大階段があつた。空気がひんやりとして張り詰めている。

僕はその階段を登っていく。

僕は、悪くない。

悪いのは彼女……そう、悪いのは彼女。

わかってもらえないのなら、別れればいい。

彼女のことどう思っているの？

……わからない。

ステンドグラスがはめ込まれた窓から、優しい光が差し込んできた。

目を細めた次の瞬間、大理石の石段が囁き声を返してきた。

「ここは判決する場所。君の判決の番だ」

僕は、歩みを止めた。

この階段をこのまま登ると、答えが出てしまう。

緊張しながら次の一步を進めた。

また石段が囁いた。

「彼女だって別れたいと思っているかもしれない」

そんなはずは……

彼女の怒った顔、笑った顔、泣いた顔が交互に目に浮かんできた。

「異議あり」

僕が思わず大声で叫ぶと、周囲の人が、びっくりして僕を見た。

僕は、方向転換して、勢いよく階段を降りた。

やっぱり、彼女に会いたい。会って話をしたい。

自分たちのことは自分たちで決めたい。

光を背にして、僕は外へ向かって走り出した。

作品番号：10

作品タイトル：未来の家族に祝福あれ

選択画像：B

「あのステンドグラス、ちょっと見ていこうよ」

謎解きゲームを彼女と遊び終えた後、中央階段室から帰ろうとしていた私は無邪気な声と共に手首をぐいっと引っぱられた。

彼女の視線を追った先には、多彩なガラスが繋ぎ合わせられたステンドグラスがあった。かつて裁判所であったこの場所らしく、そこには天秤をモチーフにした絵柄が象られている。

「さき行っちゃうよ！」

彼女は私からパッと手を離すと、天真爛漫な足取りで大理石の階段を上がっていく。

待ってよ、と後を追ひ、よろめく。すると、足下に落ちているシロツメクサの花びらが目に入った。そうだ、ここはウェディングフォトの名所でもあるんだ。

——「そろそろ、今後のことを考えないとね」

ここへの道すがら、市役所を横目に彼女はそう呟いた。絡めた指が震えているのに気づきながら、私はまた聞こえないふりをした。

私と彼女は何もかも同じだった。好きな物も愛情の向きも。そして、性別も。

彼女の気持ちには応えたい。だけど、両親や友達から「いつか二人とも良い相手が見つかるよ」と、この関係は恋人ごっこに過ぎないと言われる度に、彼女に相応しいのは私じゃないと思えてならなかった。

「早く！ 来てよ！」

彼女の呼びかける声が聞こえてハッとした。立ち上がり、階段を踏みしめる。

天秤の周囲を埋める透明なガラスは、外の炎熱を受けて真っ赤に染まっていた。裁きの業火となって燃え盛り、女は男と契りを交わすという歴史に嘆く私を灼く。

——けど、私は。私達は。

やっと最上段にたどり着く。

ステンドグラスの前で彼女がくるりと翻り、いじらしい顔を私に向ける。

「やっと来てくれたね」

目を奪われた。

赤、緑、青——ガラスから差し込む種々の光芒が彼女へ降り注いで紡がれた輝きに、私は視た。純白のウェディングドレスを纏い、幸せそうに微笑む花嫁の姿を。

「ごめん。ずっと待たせてた」

潤んだ瞳の彼女を抱きしめる。天秤から零れる祝福の光を浴びながら。

作品番号：11

作品タイトル：あゝ、もてなしの日

選択画像：C

のぞみの指定席予約よし！うなぎのお店の予約よし！観光イベント予約よし！

僕は張り切っていた。自社の社長との接待を任されることになったからだ。

営業部なだけあって元々下調べは得意だ。それ故の大抜擢である。緊張を募らせながら入念にスケジュールを確認し、当日に臨んだ。

「趣のある場所だね」

重厚感のある納屋橋とその下を流れる堀川を見て社長はつぶやく。辺りは桜が満開である。

船着場に着き、僕は手のひらを向けて示しながら切り出す。

「こちらのクルーズに乗っていただこうかと」

「クルーズ……私はあまり水は得意ではないのだが」

血の気が引いた。社長が水嫌いだなんて聞いたことがなかった。

「波が立つようなところではないですし、ライフジャケットもあります！」

「揺れが不安でしたら、中央に乗せてもらいましょう！」

同行している上司のフォローで社長の承諾を得たものの、表情は曇ったままである。

どうか、どうか無事に、トラブルなく下船できますように。

武将が満を持して乗船する。威厳のある武将らしく前方の席で鎮座するだけかと思いきや、それはそれは楽しくお話を始めた。

僕は舌を巻いた。

僕でも知らない話を沢山してくれる。しかも、小さな子供まで楽しめるではないか。

水面に浮かぶ桜の花びらをかきわけてクルーズは進んでいく。武将隊のガイドは盛り上がり、気づけば下船の時間になった。

社長、本日はいかがでしたか、僕のご案内は。

「名古屋めしは美味しいし、桜も見れた。何より『おもてなし武将隊』ってのは面白いね！水の怖さなんてどこかへ行ってしまったよ。彼らが一番良かった！」

僕は大きく息をついて思わず苦笑いした。

武将のおもてなしには太刀打ちできないや。

作品番号：12

作品タイトル：あの橋のように

選択画像：C

外はよく晴れていて、テラス席には気持ちの良い風が吹いていた。私は眼下に流れる堀川を眺めながら、今しがた告げられた話の内容を反芻した。

恋人の祐介が勤める建設会社が、橋を架ける新規事業を始めることになった。場所は地球の裏側、任期は三年。同僚に誘われた祐介は、その事業に参加するかどうか迷っていた。

「……やっぱり、辞めようかな」

「え、何で？」

思いのほか鋭い声が出て、祐介が肩を縮める。

「だって行ったこともない遠い国で何年も働くななんて不安だし、その間、愛架とも会えなくなるし」

「私を理由にするわけ？」

「いや、そうじゃないけどさ」

高校時代からの付き合いだが、この優柔不断っぷりには毎度呆れる。告白だって結局私からしたのだ。

「祐介ずっと言ってたじゃない。いつか橋に関わる仕事がしたいって」

高校時代、橋好きの彼に連れられてよく堀川沿いを歩いた。祐介はこの先に架かる納屋橋を特に気に入って、いつも時間を忘れて眺めていたのだ。

「橋の魅力は大きさや形だけじゃないんでしょ？ 一度架けられた橋は、その土地の人々の生活をずっとそばで支え続けるんだって、いつか自分もそんな風に人のためになる仕事をしてみたいって、言ってたじゃない」

就職して五年。そろそろ結婚も視野に入ってきた年齢だ。けれどそれよりも、今は祐介の夢を全力で応援したかった。

「……思い出したよ、その気持ち」

祐介は背筋を伸ばすと、真正面から私を見つめた。その表情に、もう迷いはなかった。

「俺、挑戦してみる。橋を架けることはきっと、誰かの幸せに繋がるはずだから」

「そうこなくっちゃ。待っててあげるから、立派な橋を架けてきてね」

祐介は力強く頷いた。

「いつも支えてくれてありがとな。俺にとって一番の橋は、これまでもこれからもずっと愛架だけだよ」

その不器用な告白に、私は思わず噴き出した。つられて祐介も笑い出す。

視界の端で堀川の水面が、キラキラと光って見えた。

作品番号：13

作品タイトル：アユたちの居場所

選択画像：C

「おばあちゃん、お店やめるの？」

探していた姪は、堀川沿いの小道に座っていた。店に置いてあった古いお手玉を手をしている。年期の入った小豆入りの袋が、一つ二つと宙に舞う。

「腰が悪いんだ。無理させられないよ」

四〇年続けたお好み焼き屋を年末で閉めると聞いたとき、改めて母の年齢を思い出した。仕事を辞めて名古屋に戻った俺の目に、母は一回り痩せて見えた。

「学校が終わったらどこに行けばいいのかな」

姪の声が震える。店から姿を消したのはそれが原因か。

兄の子であるこの姪は、共働きの両親に不満も言わず、毎日、母の店で過ごしている。油ジミのついた机で勉強する姿を、帰省のたびに俺も見ていた。

「あの店が気に入っていたか」

姪が落としたお手玉を拾い、砂利を払って渡してやる。補修された、つぎはぎの生地に見覚えがあった。

記憶の中の自分が、母にひっぱたかれた。

小学生の自分が抱えていたお手玉が石畳に落ち、空き缶が手からこぼれて転がっていく。

――汚れているからといって、汚してはいかんよ。

堀川に投げ捨てようとした空き缶を拾い上げた、母の諭すようなつぶやき。あの夏匂っていたへドロ臭が、今は消えていた。「なあ」

「堀川に、魚の鮎が来るって本当か？」

「大人が言ってた。この辺来るのはまだ赤ちゃんで、見てもわかんないらしい」

錆びた川縁のフェンスに手をかけ、堀川を覗く。

底は濁って見えない。

でも鮎が帰ってくる場所になった。母は正しかった。

「店は俺が続ける」

そのために仕事を辞めて戻ってきた。振り返ると姪が顔を上げていた。

「おばあちゃんも手伝ってくれる。アユ、帰るぞ。お好み焼き、食べるだろ？」

母から俺そして姪へ、居場所が渡る。つながりが輪になっていく。

姪が隣に立ち「アユの場所、なんでわかったの？」と問う。

「おじさんも昔、ここでお手玉をしたんだ」

姪から借りてお手玉を回す。ひとつ、ふたつ、みつつ。

循環が永遠に続く輪となって、宙に生まれていた。

作品番号：14

作品タイトル：川の途中に

選択画像：C

今日もまた、パソコンの前でチラシの修正をしていた。お客の細かな要望に応えるたび、自分が少しずつ削れていく気がした。気づけば、外に出ていた。

堀川沿いの小径を歩く。水面にゆらめく陽光に引き寄せられる。視線の先でゴンドラが揺れていて、思わず乗り込んだ。舟は水を撫でるように進んでいく。納屋橋、錦橋――橋をひとつくぐるたび、街の音が遠ざかる。橋の裏側には、水と風だけが淡く息づいていた。

「この線、いいな。」

高校の美術の先生の声が、ふいに蘇る。美大へ進み、卒業制作では川を描いた。あの頃は、描きたいものが尽きることなく湧いてきた。けれど、絵では食べていけない。小さな広告代理店に就職し、描くことよりも生きることを選んだ。今は、堀川を遡る小舟のように、流れに抗うのがやっとだ。

舟が折り返す。同じ川を戻っているはずなのに、景色はどこか別物に見える。

川岸の階段に、光を抱き込むように背を丸め、スケッチブックに夢中な少女がいた。

その姿に、かつての自分が重なり、目が離せなかった。時間を忘れて線を辿っていたあの頃。描くことが、世界のすべてだった。舟の揺れに合わせるように、心の奥底に沈んでいた何かが浮かび上がってくる。

「行きと帰りで、見えるものが変わる。不思議ですよ、同じ川なのに」

船頭が、私の胸の内を掬い取るように言った。

納屋橋に戻るところには、絵の構図が頭に浮かんでいた。舟を降り、久しぶりに画材店の扉を押す。棚の奥に、昔、川を描いたエスキース帳を見つけ、迷わず抱えた。

帰宅し、机に向かう。鉛筆を握る指が、かすかに震えていた。その震えごと、紙の上に置く。

紙の端に、川岸の少女を描く。もう一方には、対岸からそれを見つめる少女を描いた。二人の間には、川が流れている。どちらの少女も、川の向こうを見つめていた。

――描くことでしか辿り着けない場所が、きっとある。

そう思いながら、私は川の途中に、線を引き始めた。

作品番号：15

作品タイトル：この川の向こうには

選択画像：C

就職面接の帰り道。刺すような川風が、凍りついた頬を引っ掻く。今日はまっすぐ帰る気になれず、人けのない堀川沿いへと逃げ出した。遠くで聞こえる車の音。肩を落とした影は、いつもよりずっと小さかった。

「きゃはは！早くこっち来いよー！」川岸の向こうから、誰かに呼ばれた気がした。顔をあげると、頬を真っ赤にした子どもたちが無邪気に自転車を漕いでいる。ガチャガチャと乱暴なチェーンの音。その背中に、懐かしい夏の匂いがした。あれは、小学3年生の夏休みだった。

「この川って、どこからきてるかな」親友との何気ない会話が、冒険のはじまりだった。「自転車で追いかけたら、わかるかもしれない」そう返すと、親友は体ごと乗り出す。「ずっと行ったら、富士山かもしれんぞ！」僕らは顔を見合わせて、大きく頷いた。ふたりだけの秘密の大冒険。150円を片手に握りしめ、ペダルを強く踏み込んだ。

日差しを浴びてきらめく水面が、名駅のビル群を揺らす。途中で納屋橋のアーチをくぐる川船を見つけた。「あれと勝負しよう！」とお尻を浮かして、必死にチェーンを漕ぎ回す。やがて天守閣が姿を現すと、未知との出会いに胸が震えた。日が暮れはじめたとき、僕らが辿り着いたのは、庄内川へと注ぎこむ大河への交差点だった。視界にいっぱい広がる川波と夕焼け。まだこんなにも雄大な景色が広がってるなんて。僕らは河原に小さく腰を下ろし、150円のジュースで乾杯した。冷えた炭酸が乾いた体に染み渡る。地平線へ溶け込む太陽が、僕らを少しだけ大きくさせた。気づけば子どもたちは駆け去っていた。冷えきった体に温かさを求めて、近くの自販機で150円のホットミルクを買った。あの日の僕は、まだ生きているだろうか。確かめるように缶を握りしめると、掌から温もりがじんわりと伝わってくる。僕はもう一度、前へ歩き出した。この川の向こうには、あの日の僕がまだ微笑んでいる気がした。

作品番号：16
作品タイトル：仲間
選択画像：C

「ここ…どこだろう。」

名古屋駅近くのビルで面接を終え、何の気なしに歩き始めたのが10分前。二社目の面接までは一時間以上ある。周辺を少しぶらつくか、なんて、気軽に考えたのが失敗だった。ビルが連なる道ですれ違うのは、迷いなく歩くスーツ姿の大人たち。誰もが分刻みの行程を脇目も振らず進んでいる。

対して私は、自分の進むべき道も定かでない。焦りが襲う中、スマートフォンの地図アプリに齧りつき歩みを速めた。履きなれない黒のパンプスが悲鳴を上げている。

「この先の信号を二つ行ったら、右に曲がればいいのか。」

やっと見通しが立ち、焦りが消えたせいか視界が明るくなった気がした。

いや、本当に自分の周りが明るいことに気がついた。顔を上げると、灰色のビル群がすっぽりと抜けたような空間が広がっている。

穏やかに流れる川、ドラマに出てくるようなクラシカルな橋と建物、風を受けて少し揺れる川沿いの花飾り。そして、どこか満足気な空。

途端に体が軽くなり、私は大きく息を吸い込んだ。

視線を下げると、そこには一艘のゴンドラ。

右に左に揺れながらも、水面に映るビル群をかき分け、ひと漕ぎひと漕ぎ、進んでいる。最新式のボートのように、速く一直線に航行しているわけじゃない。でも、その揺れを、進みを、お客さんもゴンドリエーレも楽しんでいるように見える。

ああ、仲間を見つけた。

私も進もう。揺れながらでもいい、一歩ずつでもいい。そのことを、楽しみながら進んでみよう。

作品番号：17

作品タイトル：夏の堀川は何が起こるかわからない

選択画像：C

夏の堀川は何が起こるかわからない。

僕を置き去りにして屋形船は出航してしまった。

営業部の夏季慰労会出席者 48 名なのに一人いない。1 か月も前から席を決めておいたのに皆好き勝手に座るから誰がいらないかわからない。僕が下船して確認している間に、出航時刻になっていたのだ。

まさか幹事の僕を置いていくなんて……。そんなに存在感、薄いのかな。

堀川を悠々と滑ってゆく屋形船を見送りながら、額の汗をハンカチで拭う。夕闇がゆっくりと忍び寄る。

ギョコ、ギョコ

聞きなれない音を耳が捉える。

ろ船が僕の方に近づいてきた。

「乗り遅れたんでしょ？」

船頭が明るく声をかけてきた。赤白のボーダーシャツにキャップ姿はゴンドラの方が似合いそうだ。

呆然としていると

「薄井さん」

後ろから僕の名前を呼ぶ声がした。

「良かった。待っていてくれて」

営業一課の亜弓さんだった。

走って来たのだろう。白いハンカチで首筋の汗を押さえている。

いつも明るくテキパキと仕事をこなす彼女は、皆の人気者だ。外回りの後、合流する筈が相手先の都合で遅れてしまったという。

「別に船を用意されていたんですか？流石！」

そう言われると、違うとは口にできなくなってしまった。

船頭は澄ました顔をしている。

「薄井さんは、仕事の準備もいつも完璧で助かっています」

その言葉に、また汗が噴き出る。完璧なんかじゃないのに。

二人でろ船に乗り屋形船を追う。堀川沿いの町並みに明かりが灯り、川面がそれをキラキラと映し出す。

川を渡る風が二人の間をすり抜ける。

「あっ、涼しい」

僕と亜弓さんは同時に声をあげ、思わず顔を見合わせて笑い合う。

「亜弓さん、折角の屋形船に乗せてあげられなくて、すみませんでした」

僕が謝ると

「そんな。むしろ、こんな素敵な体験ができてラッキーです」

そう言って微笑んだ。

その笑顔に僕の心臓が騒ぎ出す。顔が赤くなったことに気づかれたかも。

船頭がニヤリとした。

夏の堀川は何が起こるかわからない。

作品番号：18

作品タイトル：春を下る

選択画像：C

五月の堀川を、船は滑るように進んでいた。

——なんか、名古屋じゃないみたい。

見慣れているはずのビル群を仰ぎ、私は感心する。船に乗るだけで、こんなに景色が変わるとは知らなかった。

「それで、『堀川を掘れ』と命じられたんですか？」

「そう、家康様にな。責任重大だろう？」

後ろの席から聞こえてくるのは、夫と年配の男性の声だ。甲冑姿のその男性は、堀川の歴史について説明しているらしかった。歴史好きの夫が合いの手を入れるせい、だんだん声が大きくなっている。

「五条橋です」

船頭の男性が明るく言った。五条橋をくぐると、残りは半分強だ。前の席の若い女性たちが、「あっという間だね」と顔を見合わせる。

「材木や石を運ぶには、船が最適ですよ」

「ああ。堀川ができてからは、米や味噌なんかも船で運ぶようになったが」

夫と甲冑の男性は、まだ歴史談義に花を咲かせていた。船上の眺めなど眼中にないようだ。

やがて前方にまた橋が見えてきた。終点の納屋橋乗船場だ。

「ほら、あそこじゃ」

「……っ！」

不意に顔の横に腕が突き出てきて、私は危うく叫びそうになった。見れば、甲冑の男性が橋の欄干を指さしている。

欄干には、丸に十字をデザインしたレリーフがあった。もしかして家紋だろうか。

「あれは……」

私は呟き、後ろを振り向いた。しかし、そこに甲冑の男性の姿はない。代わりに夫が意味ありげな笑みを向けてきた。

——やっぱり。

正直、驚きよりも納得のほうが強かった。武将隊同乗の便はあるが、それを選んだ覚えはないからだ。話の内容から察するに、甲冑の男性は堀川を作った武将なのだろう。

——確か、福島正則だっけ？

目顔で夫に問うと、彼は笑みを深めた。そのまま薄れるように、船上から姿を消す。思いがけず武将と話すことができて、満足だったに違いない。

川べりの街路樹は青々と葉を繁らせている。

夫の好きだった春が、今年も終わろうとしていた。

作品番号：19

作品タイトル：揺れる赤

選択画像：C

仕事帰りに、伏見のオフィス群から逃げるようにして、堀川の橋まで来た。

川の水とおしゃれな建物が煌めいているここに立つと、一瞬自分までもが、その一部として輝いているような気がする。

私は橋から覗き込むようにして川を眺めた。

澄んでいるとはいえない、濁りのある水。

けれど、水面に映る自分が、少しぼけて映し出される感じが悪くない。

――あれ??

赤い服を着た女性が映っていた。

周囲を見てみても、そんな人はいない。

私はもう一度、水面を見つめてみる。

もしかしたら、あれは私?

首を傾げてみると、その女性も同じように傾げる。

けれど、私は自分の着ているのは、グレーのニットだ。会社で目立たず、パーソナル診断にも合う無難な色。

「あの、すみません。あそこに赤い服映ってませんか？」

咄嗟に近くにいた高齢の女性に声をかけた。

「どこかなあ、目が悪いからよくわからんよ」

女性は、困ったようにいった。

「あそこです、あの赤いの。赤の……」

「あなた、赤が好きなのね」

女性は水面ではなく、こちらを見ていった。

「えっ、私？」

そういいかけて、咄嗟に思い出す。

私は、赤が好きだった。

小さい頃、いつも赤いものを身につけていた。

「赤、好きでした」

「私も好きよ」

女性はにっこり笑うと、小さく手を振って去っていった。

私は、水面に映った自分に、そっと手を振った。

そっか、忘れてたんだな……

次の瞬間、一艘のゴンドラが通り、乗客が私に手を振ってくれた。

通り過ぎた後もう一度水面を見ると、赤い服を着た私はいなかった。

でも大丈夫。もう思い出した。私は赤が好きだということを。

作品番号：20

作品タイトル：流水と母性

選択画像：C

約束の時間まであと二十分。少し着くのが早かったかなと思いながら、私はぼんやりと川を眺めていた。

今日は、久しぶりに母と会う日で、十二時にここで落ち合うことになっている。一人暮らしを始める私をずっと心配していた母。その顔を思い浮かべながら川を見ていたら、ふと、昔堀川について調べたことを思い出した。

江戸時代から名古屋の発展を見守り、支えてきた、名古屋の母なる川。そのおおらかに流れる姿が、自然と母に重なった。あの人、心配性ではあったけれど、私の夢を誰よりもまっすぐに応援してくれたんだよな。

ピコンッ。スマホから着信音が鳴った。取り出してメッセージを見ると、母から、「今どこ？」

ときていた。奥の方に目を向けると、納屋橋の上でうろうろしている人の姿が見えた。あれだな。私はスマホをカバンにしまうと、少し駆け足で母のもとへ向かった。